

東京都 ひのふらむら
檜原村から

脱都会五大家族 山奥に住んで

脱都会五人家族 山奥に住ん

ひのけらむら
東京都檜原村から

玉木英幸



AKI

著者紹介 たまき ひでゆき
玉木英幸

1941年熊本県天草生れ。千葉県保田海岸で育つ。都立日比谷高校、アテネフランセを経て、外資系広告代理店ファルコン社入社、コピーライターになる。禅道場「秋川神冥窟」を訪ね初めて檜原村を知る。その後家族5人で村に移住。現在、自給自足を目指しながら小説、童話などを執筆。

画家紹介 たまき あきこ
玉木昭子

1943年東京都大森に生れ、世田谷で育つ。都立三田高校卒業後油絵の研究所に学ぶ。1967年結婚、三児の母。

●朝日リビングニュースに「檜原村通信」を夫婦で連載。挿絵数枚を本書に転載。

東京都檜原村から

1981年12月15日 第1版第1刷発行

著 者 玉 木 英 幸
© 1981年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 岩 村 田 活 版 所

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1-5 番

振 替 東 京 9-8 4 1 6 0 番

郵便番号101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in Japan

△ブローグ△

過去から出てきた男

私はそのムードが好きだった。船中どこを歩こうかとがめる者はいない。

一九六一年八月二一日午前一〇時塘沽新港を出発した貨客船、ポーランドのヤネク・クラシスキー号の船客は、六日前同時に釈放された私たち三人のほかには、ユネスコ関係者だというポーランド人の老紳士一人だけであった。今は中国側の人はいない。同年八月一五日付中華人民共和国最高人民法院軍事審判廷刑事裁定書がパスポート代りである。

私は一等船室にひとりで、今吉均さんと佐古龍裕さんは、同じく二人で入った。もちろん旅費は私たちを日本に送還する中国持ちである。食事は、テーブルはちがうがいつも船長や事務長と一緒に。片ことの英語でも身振り手振りを混ぜてけっこう通じる。乗船二日目の朝食の時、船長が、「家族に電報を打ってやるから英文で電文を書きなさい」といって用紙をくれた。

「We have no money」

「No matter」

東京都檜原村から／目次

空家さがし 7

引つ越しに四十日間 13

禪と村の青年 21

大家の栄さかさんのこと 29

東京で一番小さな小学校 33

運動会のあとの酒宴 42

畑づくり 48

家族よりそい火をかこむ冬 56

春がきた！ 62

夜桜 68

村人といっしょに、土方に出たこと 72

ヒロさんのこと 80

動物たち 86

小河内峠へ 101

炭焼き志願 106

村の土葬 111

賽さいの河原の間引き地蔵 117

椎茸栽培 121

わが家の壁新聞 124

お医者さん、駐在さん 128

水と火によせる一章 133

タマゴロー奮闘記 139

暗闇を歩く 145

餅つき失敗談 149

漬物の味 154

長靴を買いに 158

村のソフトボール大会 162

台風 167

栄さん語録 172

小さな虫 180

麦の一日 184

素描 189

終りに、そしてこれから 197

空家さがし

東京都西多摩郡檜原村。

標高八百メートルの山奥の一軒家。

家の人は十年前に山を下り、その家は空家になっていた。一九七九年七月、私たちはこの空家を借りうけ、家族五人、三鷹市より移り住んだ。こんな所に住んでみたいと思いはじめてから五年、実際に檜原村に空家さがしに度々やってくるようになってから、三年目のことだ。

家が見つかったのは、偶然でもあったし、そして幸運でもあった。村に通いはじめてからは、ますますその魅力にとりつかれ、腰を落着けて空家さがしをするために、私たちは村役場に泣きついて村営住宅に仮寓させてもらう手筈になっていたのだから。村役場にはあまり何度も顔を出すものだから、私たちは「顔」を知られてしまったし、人口減少の途上にある村としては、家族五人の転入に、よろこんで便宜をはかってくれたのであろう。

しかし、村営住宅への入居が決まっても、私たちはなぜか腑におちぬ気持ちが残っていた。いった

んそこに住んで、ゆっくりとあちこち、もっと徹底的に、探してみよう……、そんなつもりだった
が、なぜか、もうひとつ気がすまない。

その日、三鷹のアパートで夕食のあと、私は子供たちに言い渡した。

「明日、お父さんとお母さんは、もういちど檜原村に行ってくる。帰りは遅くなるけれど子供たちはちゃんと留守番をしていなさい」

「村の北側のいちばん奥に、小さな学校があるんだ。まるで幼稚園みたいな……。前に一度見たので覚えてるけど、あんな学校に子供たち通わせたいな」

私は妻に言った。

とにかく、もう一度だけ。そうきめて私たちは翌日の朝早く、家を出た。そして、麓の小さな小学校をつくづくとながめ、さらに山を上って行くと、途中で二人の村の主婦に会い、その人たちに、いざ、(稗差)の空家のことを聞いた。私たちは道と方向をたずね、すぐにその家を見に行った。家は、文字通りの山奥の一軒家だった。杉木立の密生した山腹に、大きな古い農家がヌ、と現れた。周囲の畑は荒れ放題で、茅、葛藤、ありとあらゆる雑草か、茫々と繁っている。そしてこの家は、色々な意味で、今まで私たちが見てきた空家とはケタちがいの条件をそなえていた。家そのものは、古くて、大きい。あたりには、人家も見えない。庭から見える光景は、森と、山々の連りだ

けだ。山道は、細々としていて、そして遠い。

玄関から土間に入ってまず眼についたのか、家の内部の黒さだった。太い大黒柱、周囲の壁、むき出しの天井を支える柱、すべてか黒い。それところか、家中の部屋のすべての建具が、黒一色だ。私たちは、やかてここに住み、マキという燃料にたよる生活をはじめることになって、ようやくこの家の黒さの意味を理解したが、最初は雑巾でよくこすれば落ちる汚れぐらいに考えたものだった。この黒い色こそは明治十二年に建てられたこの家の、百年間にわたるカマトの煙が、家中に流れていた、そのたしかな証拠だったのだ。建坪五十坪、三階建て、茅葺屋根のこの家は、この地域の典型的な農家のスタイルを持っている。土間と台所かとても広く、二、三階は養蚕の仕事場として作っている。そのほかに、土蔵、堆肥小屋、オカイコの乾燥小屋などの別家屋がついている。台所のすぐ隣は馬小屋になっているし、さらに、味噌、醤油、お茶などの製造・保存用の家屋もある。家というより、屋敷という感じだ。

家主の田倉栄（さかえ）さんは、十年前までこの家に住んでいた。今は檜原村の小学校の教員をしている。炭焼きをしながら、通信教育で先生の資格を取った人だ。

私たちか、家を借してほしいと話しに行くと、貸すのいいが、生活が大変だから、と私たちに

山奥の暮しの悪条件をすべて説明してくれた。この時の栄さんの話は私たちにとって、とても有難いものだった。何から何まで生活必需品を背負って上らねばならぬ山道のこと、冬の雪や、寒さのこと、村には収入源としての仕事が少ないこと、学校は僻地校で生徒の数が極端に少ないこと……等々。ふつうの人間ならこの話を聞いただけで気持がグ、ラ、ッ、イ、でもおかしくなかつたろう。

村に住みたい、という気持ですべてが盲目的になっていった私たちは、その時は栄さんの言葉もろわの空であつた。（あとになって、そのひと言ひと言に思い当るのであるが）そして、私は、人間がある時期、盲目的な行動をとるのは、必要であり、よいことだと思っている。

仕事の上での野心ではない、金もうけのためでもない、単なる楽しみのためではサラサラない。

村に住みたい、

東京にはもういられない、という、

その気持だけが、あつた。

いたんだ戸戸をなおし、風穴をふさぎ、障子をはりかえカーテンやじゅうたんを備えると、へいざすの家は見ちがえるようになった。

住んでみて驚いたことがある。ここには、風がほとんど吹かない。関東地方に台風がやってきた



場合でも、微風ぐらゐの風しか吹かない。幾重にも周囲をとりかこんだ山々のせいだろうか。冬暖かく、夏は涼しい（山は上の方が暖かいというのは生まれて初めての発見である）。家の周囲にまねんなく陽が当たる。すべての立地条件のよさにほとほと感心した。家は、村人が集まって（もちろん専門の大工も入って）ずいぶん手伝って建てたものであるという。クギやカンナなどを全く使わぬ、昔ながらの建て方で、百年たってもビクともしていないこの家の柱を見上げながら、明治時代の村人たちの深い知恵が、家ひとつとっても、まざまざと感じられるのである。

麓から、へいざすのわが家までは、四十五分の山道を上らなければならない。「大変でしょ。上り下りが」と人に問われることがある。

そんなとき、私はこう答えることにしている。

「ええ、大変です。でも途中であきらめたら、自分の家に帰れませんから」

家が大きいことに加えて、周囲はすべて山なので、どんなに大声を出しても、人に迷惑をかける心配がない。三鷹のアパートでは、せいぜいヴォリューム2で聴いていたステレオを、今は最強音で聴くことができる。自然私たちのふだんの会話も声が大きくなったようだ。「ごはんですよ」という号令を三人の子供たちに伝えるために、妻は怒声に近い声をはり上げている。これは、お互いの健康維持の上で、非常によいことだと私は思っている。

広過ぎて困ることもたまにはある。トイレの紙がなくなっても、呼んでもなかなか通じない。末っ子の理風は、そのために三十分間トイレに閉じこめられて、泣きべそをかいた。夜の旧家の、便所はこわい。……幼い日に味わった、あの背筋がゾクゾクするような気分を、私たちはまた、思い出した。

引っ越しに四十日間

引っ越しにはまるまる四十日間をついやした。

持主の田倉栄さんとの話もまとまり、私たちは、三鷹のアパートをひき払って、いよいよ檜原村にやってきた。家具類一切で二トントラック二台分。私たちはその荷物を藤倉小学校の下、春日神社の前につみ上げた。第一日目に背い負上げた荷物の内容は、次の通りである。

妻、昭子……鳥籠に入れたセキセイインコ三羽。これも鳥籠に入れた猫のタマゴロー。手にはバケツと箒

長男、麦……学用品と食器すこし

長女、玲子……ローソク、懐中電灯、マツチ

次男、理風……ラーメン、箸、チリ紙

夫、英幸……米と味噌・寝具

春日神社の前に山と積みあげられた家具類を見てある村人が「おそろしいこっちゃ」と言つて通つたそうだ。まさに、そのとおりのことになった。一週間もあれば……と考へていた引越は、十日過ぎてても、二十日過ぎてても終らなかつた。もちろんこれらの荷物を、全部背負い上げるのは不可能に近い。私たちは、村人が使つてゐるパワーカートという軽便な動力付運搬車を購入してゐた。これに乗せて途中まで運び、道が細くなるその先は、自分たちの肩でかついで行く予定だつた。初日、そのパワーカートは、二回崖下にズリ落ちた。軽い荷物でこうなのだから、タンクや冷蔵庫などはとても無理だ。だいたい、春日神社に荷をおろしたことが大間違ひで、へいざすに荷を上げるためには、別の道、葱岳沢のどんづまりから上らなければパワーカートが役に立たないことが、わかつた。私が、誰にも相談せず、独断で春日神社に荷をおろしたことの結果が出たのだ。ほんとうに「おそろしいこと」をやろうとしていたことになる。

二日目以降、私たちは一度おろした荷物を、ポツポツと葱岳沢へ移しはじめた。借りたトラックは返してしまつたので、わがボンコツのブルーバードに載せて運んだのだが、その時間のかかるこ